

幼児・保育分野で学ぶ短期大学生の短期大学教育に対する意識と評価

宮里 翔大

【要旨】

本研究は、短期大学基準協会の実施する「短期大学生調査」(2017年度)の結果を用いて、幼児・保育分野で学んでいる短期大学生が短期大学教育でのような経験をしているのか、そしてどのように評価しているのかを他分野との比較を行いながら検討し、その上で短期大学での学びに関する総合満足度の結果により学習経験や知識・技能の変化に違いがみられるのかを検討するものである。その結果、幼児・保育分野の学生の短期大学教育全体に対する満足度は短期大学の他分野と比較してやや高い傾向がみられ、幼児・保育分野の学生の学びに関する総合満足度の違いによって学習経験や学習経験や知識・技能の変化に大きな差が生じることが明らかとなった。

キーワード：短期大学生調査、短期大学、学生調査、学習満足度

1. はじめに

高等教育機関を取り巻く環境は厳しさを増しているとされているが、短期高等教育機関の一つである短期大学に目を向けると、学生数の減少に伴う統廃合や四年制大学への改組等が積極的に行われている状況にある。また、2019年度より実践的な職業教育を行う機関として「専門職大学・短期大学」が設置される予定であり、従来から職業教育を担ってきた短期大学を取り巻く環境はより一層厳しさを増すと考えられる。

しかしながら、短期大学が現在までに果たしてきた役割は非常に大きく、地域に根差した高等教育機関として、そして女子教育の機会拡大を担う機関として短期大学は大きな役割を果たしてきた。また、最盛期に比べ大幅に規模を縮小した短期大学であるが、社会からの期待は現在においても決して小さいものではない。中央教育審議会の「短期大学の今後の在り方について(審議まとめ)」によれば、今後短期大学に期待される役割として、専門職業人材の養成・地域コミュニティの基盤となる人材の養成・知識基盤社会に対応した教養的素養を有する人材の養成・多様な生涯学習機会の提供の4点を挙げており、短期大学が今日においても果たすことのできる役割は決して少なくないと考えられる(中央教育審議会2014)。

一方で、日本社会全体の現状に目を向けると、人手不足が深刻化している。帝国データバンクの調査によれば(帝国データバンク2018)、「正社員が不足していると回答した企業は全体の49.2%」であり、「2018年上半期(1～6月)の『人手不足倒産』は70件発生し、負債総額は106億7700万円」に上るとの調査結果が明らかとなっており、4年制よりも短期間で人材を養成して

いる短期大学教育の有効性は今後高まる可能性も十分に考えられる状況にある。さらに、学校基本調査の結果によれば、2017年の短期大学在籍者のうち最も学生数が多い分野は教育系で約37.4%、次いで家政系が約18.4%、人文が約9.8%、保健系が約9.4%であり（文部科学省2017）、保育士や栄養士、看護師といった人材需要の高い分野の卒業生を輩出しており、そこからも短期大学の有用性が十分にあると考えられるだろう。

そこで本研究は、実際に短期大学で学ぶ学生が、短期大学教育でどのような経験を行い、そしてどのように評価しているのかを、短期大学基準協会が実施する「短期大学生調査（TDSC）」の2017年度の結果を用いて明らかにするものである。その中でも、短期大学在籍者の割合が最も大きい幼児・保育分野で学ぶ学生に着目して検討することとし、短期大学教育でどのような経験を行い、そしてどのように短期大学教育を評価しているのかを幼児・保育分野以外の結果との比較等を交えながら検討を行う。その上で、幼児・保育分野の学生の学習に関する総合満足度の違いによって、どのように学習経験や知識・技能の変化に違いがみられるのかについて検討を行う。

本研究で用いた「短期大学生調査」は、短期大学基準協会が実施する学生調査であり、自己点検・評価や認証評価に役立てるだけでなく、各短期大学の強みや弱みを把握して、マーケティングやエンロールマネジメントに活用することを主たる目的として実施しているものである。本調査は改訂前の「日本版短期大学生調査（JJCSS）」から数えると既に10年に渡って実施されているものであり、本研究で用いた2017年度調査には全短期大学の約16.9%、全在籍者の約13.9%が参加している、短期大学を対象とする調査としては大規模な調査である。

短期大学の在籍者を対象とした学生調査を用いた先行研究として、安部恵美子・小嶋栄子が全国の短期大学を調査対象とした「短大在学生調査」の分析を行い、短期大学教育に対する実感や満足度等を1年次と卒業時の結果を比較・検討している（安部・小嶋2011、2012）。さらに、安部・小嶋は「短大在学生調査」の結果と自大学の調査結果を比較し、自大学の現状や改善点等について検討を行っている（安部・小嶋2010）。また、本研究で用いる「短期大学生調査」に関連する研究としては、山崎慎一が短期大学と4年制大学の学習時間の比較を行う際に調査結果を用いて分析を行っている（山崎2018）。加えて、堺完が「短期大学生調査」の改訂前の調査である「日本版短期大学生調査」の結果を用いて、性別や学年、学生と教員の交流の有無等が学習効果に及ぼす影響について検討しているほか（堺2014）、堺らが同調査を用いた地域別ベンチマークの有効性を検討しているものなどが挙げられる（堺ほか2016）。本研究が行うような短期大学の特定分野を対象とする研究としては、岡村美和が2015年度調査を用いて自大学の特定学科と自大学平均・全国平均との比較を行った研究などはみられるものの（岡村2017）、特定分野の全体を対象とした研究は現状では十分に行われていない。

本研究において幼児・保育分野といった特定の分野を検討の対象とした理由は、分野間の差を検討することが短期大学で学ぶ学生の意識やそれに対する評価を検討する上で不可欠な要素だと考えられるからである。例えば進学動機を取り上げて検討すると、後藤宗理が4年制大学への進学動機について検討しており、「資格免許が取得できるかどうかが進学動機に影響して」

おり、「進学動機については専門分野のよる違いが明確」に現れると指摘している（後藤2003）。また、山田礼子によれば、カレッジ・インパクトモデルの代表的な論者であるアスティンの「I-E-O（既得情報・環境・成果）モデル」においても専門分野は1つの要素として取り上げられており（山田2007）、分野ごとに検討する有効性を示すものであるといえる。また、本研究で検討を行う、幼児・保育分野で学ぶ学生の多くが幼稚園教諭二種免許状及び保育士資格の取得を目的としており、そのための学習が短期大学での学びの中心となることから、他の分野とは異なる特質が現れることが予測される。これらのことから、分野別での検討は、短期大学全体の状況を把握する上でも不可欠なものと考えられる。

2. 研究方法

本研究では、短期大学基準協会が実施する「短期大学生調査」の2017年度の調査結果のうち、特に幼児・保育分野の学生のデータを用いて分析を行う。本研究の対象とする幼児・保育分野の分類は、短期大学基準協会調査研究委員会が独自に分類を行ったものであるが、この分野に該当するのは、保育士・幼稚園教諭資格の取得を主とする学科やコースである。なお、「短期大学生調査」の2017年度調査への参加校数は57校、参加人数は17,239人であり、そのうち幼児・保育分野に該当するのは40校、7,449人であった。

特に本研究で着目する視点として、幼児・保育分野で学ぶ学生が、短期大学教育でどのような経験を行い、そしてどのように短期大学教育を評価しているのかを幼児・保育分野以外で学ぶ学生の結果との比較等を交えながら検討を行う。その上で、総合満足度の違いによって、どのように学習経験や知識・技能の変化に違いがみられるのかについて検討を行う。

本研究で用いる「短期大学生調査」の結果については、短期大学基準協会のホームページに報告書が掲載されているので、そちらを参照されたい¹⁾。

3. 分析結果

3.1 幼児・保育分野と幼児・保育分野以外との比較

第一に、幼児・保育分野と幼児・保育分野以外との比較を行いながら、幼児・保育分野の状況について検討を行う。

3.1.1 進学理由

初めに短期大学を進学先として選択した進学理由について分析する。図1は短期大学への進学を決定した際に重視したことに関する設問を、進学理由として「全く重視していない」を1、「重視した」を4とした時の平均値を示したものである。

図1をみると、幼児・保育分野では「就職するのに必要な資格が取れる」が3.75と最も高く、幼児・保育分野以外では「自分の興味があることや専門分野の内容が学べる」が3.37と最も高い結果となった。また、双方の分野の共通点として、「就職するのに必要な資格が取れる」や「自分の興味があることや専門分野の内容が学べる」、「就職に有利」、「自宅から通学できる」が比

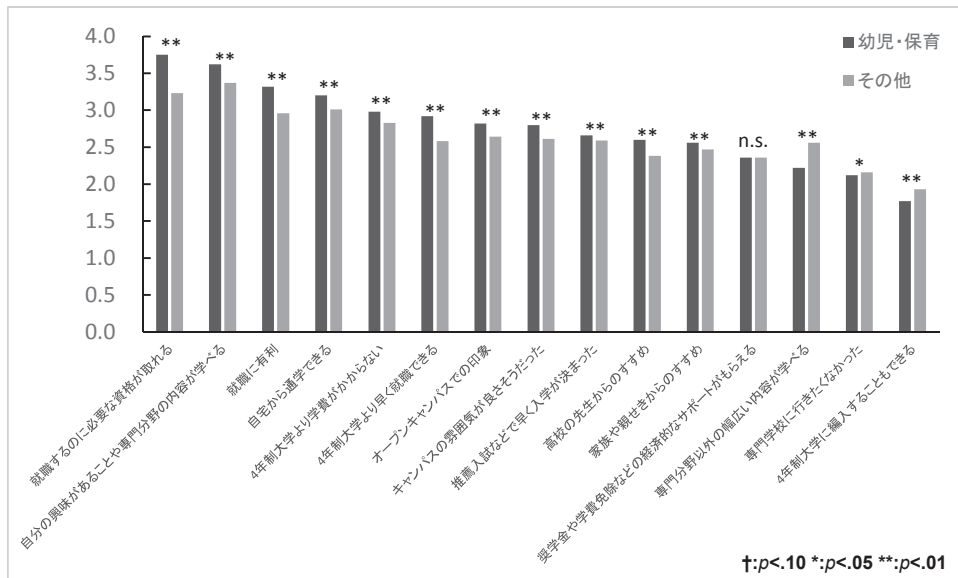


図1 短期大学を進学先として選択した進学理由 (平均)

較的が高かった。一方、「4年制大学に編入することもできる」の幼児・保育分野で1.77、幼児・保育分野以外で1.93、と最も低い結果となり、「専門学校に行きたくなかった」についても同様に低かった。

幼児・保育分野とそれ以外の分野の短期大学を進学先として選択する際に重視した項目について比較するために、すべての項目についてt検定を行ったところ、「奨学金や学費免除などの経済的なサポートがもらえる」は優位な差がみられなかったが、「専門学校に行きたくなかった」では5%水準で、それ以外の項目では1%水準で幼児・保育分野とそれ以外の分野で優位な差がみられた。その中でも平均値に比較的大きな差がある「就職するのに必要な資格が取れる」や「就職に有利」といった職業に関連のある項目は幼児・保育分野の平均値がそれ以外の分野と比較すると高く、「専門分野以外の幅広い内容が学べる」は幼児・保育分野以外が高かった。

これらの結果から、短期大学の進学を決定した背景には、地域に根差した高等教育機関であることや、短期大学の目的である職業や实际生活に必要な能力を育成すること、といった短期大学が従来から果たしてきた役割が反映されていると考えられる。また、幼児・保育分野とその他の分野を比較して保育分野の平均値が特に高かった「就職するのに必要な資格が取れる」や「自分の興味があることや専門分野の内容が学べる」、幼児・保育分野以外の平均値が特に高かった「専門分野以外の幅広い内容が学べる」をみると、幼児・保育分野に進学した学生の多くが保育士や幼稚園教諭の取得を目指しており、先に述べた幼児・保育分野のカリキュラムの特性等が反映された結果になっているものと考えられる。

3.1.2 授業における学習経験

次に短期大学での授業における学習経験について分析する。図2は短期大学での授業における学習経験に関する設問を、学習経験が「なかった」を1、「あった」を4とした時の平均値を示したものである。

図2をみると、幼児・保育分野では「体験的な学習」が3.30と最も高く、幼児・保育分野以外では「宿題や課題」が3.30と最も高い結果となった。また「体験的な学習」は幼児・保育分野以外でも高く、「宿題や課題」は幼児・保育分野でも高かった。それ以外に共通して高かった項目として「学生同士でディスカッションをする」、「パソコンなどの情報機器を使う」なども挙げられた。一方、「提出期限までに宿題を完成できない」は幼児・保育分野で1.91、幼児・保育分野以外で2.00と最も低い結果となった。

幼児・保育分野とそれ以外の分野の授業における学習経験について比較するために、すべての項目についてt検定を行ったところ、「授業で学んだ内容について学外の人と話す」と「外国語を使う」では優位な差がみられなかったが、それ以外の項目では1%水準で幼児・保育分野とそれ以外の分野で優位な差がみられた。その中でも平均値に比較的大きな差がある「学生同士でディスカッションする」や「正解や答えのない問題や課題について考える」は幼児・保育分野の平均値がそれ以外の分野と比較すると高く、「キャリアに関する教育」や「パソコンなどの情報機器を使う」は幼児・保育分野以外が高かった。

これらの結果から、短期大学での授業における学習経験は、「パソコンなどの情報機器を使う」、「体験的な学習」といった、近年高等教育機関に対して社会から求められている教育を行っていることで、これらの項目に関する学習経験が高いと考えられる。一方で、「提出期限までに

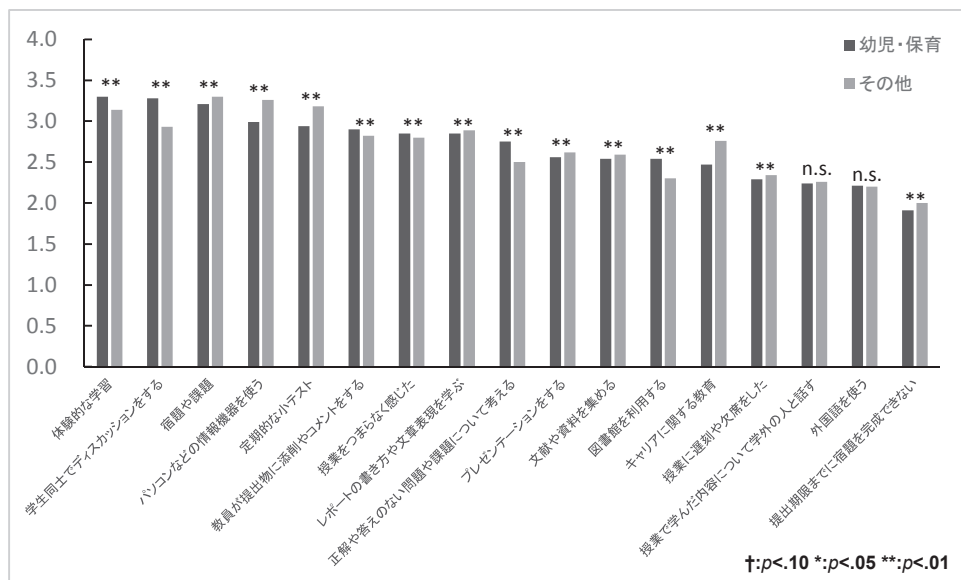


図2 短期大学での授業における学習経験 (平均)

宿題を完成できない」といったネガティブな経験をしている割合は非常に低く、短期大学で学んでいる学生は積極的に学習に取り組んでいる姿勢もうかがえた。また、分野間の差がみられる項目のうち、幼児・保育分野の平均値が高かった「学生同士でディスカッションをする」や「正解や答えのない問題や課題について考える」については、近年様々な場面で取り上げられる「チーム学校」を形成する一環としても重要な要素となることから、保育士や幼稚園教諭を養成するカリキュラムの特性が影響している可能性があると考えられる。また幼児・保育分野以外の平均値が高かった「キャリアに関する教育」については、保育・幼児分野では多くの授業が資格取得と直接関連するものであり、資格取得と直接的な関連の無い分野で「キャリア科目」と設定されているような科目が少ないことから、学生の実感としては学習経験が幼児分野以外に比べて低くなる傾向がある可能性が考えられる。

3.1.3 知識・能力の変化

次に短期大学入学後の知識・能力の変化について分析する。図3は短期大学に入学後に知識・技能の変化に関する設問を、知識技能が「大きく減った」を1、「大きく増えた」を5とした時の平均値を示したものである。

図3をみると、「専門分野と学科の知識」が幼児・保育分野では4.25、幼児・保育分野以外では4.15と、どちらも最も高いという結果となった。また「ほかの人と協力する力」や「文章（レポートなど）を書く力」、「一般的な教養」、「コミュニケーション能力」、「計画性・スケジュール管理能力」についても共通して高かった。一方、「外国語を使う力」は幼児・保育分野で3.00、幼児・保育分野以外で3.06と最も低い結果となった。

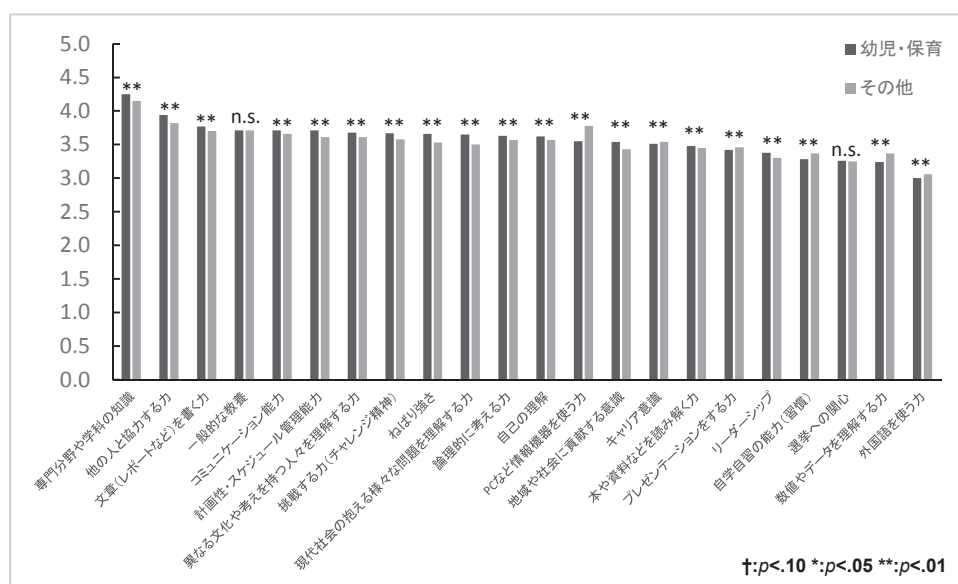


図3 短期大学入学後の知識・能力の変化 (平均)

幼児・保育分野とそれ以外の分野の授業における学習経験について比較するために、すべての項目についてt検定を行ったところ、「一般的な教養」と「選挙への関心」では優位な差がみられなかったが、それ以外の項目では1%水準で幼児・保育分野とそれ以外の分野で優位な差がみられた。その中でも「現代社会の抱える様々な問題を理解する力」や「ねばり強さ」は幼児・保育分野の平均値がそれ以外の分野と比較すると高く、「PCなど情報機器を使う力」や「数値やデータを理解する力」は幼児・保育分野以外が高かった。

これらの結果から、全体として短期大学での学びにより特に専門分野の知識が大きく向上していることが明らかとなり、一般的な教養についても同様に向上していたことが明らかとなった。学校教育法における短期大学の目的は「深く専門の学芸を教授研究し、職業又は实际生活に必要な能力を育成する(第108条)」であり、短期大学では分野に関わりなく専門分野と一般教養の双方が積極的に取り組まれていることが、学生の実感としても表れているものと考えられる。また、分野間の差がみられる項目のうち、「PCなど情報機器を使う力」は幼児・保育分野以外が幼児・保育分野に比べて高かったが、高本明美らの調査によれば、ほとんどの保育所でパソコンが活用されているが、手書きの重要性を指摘する声も挙げられていたとの指摘もあり(高本ほか2010)、そのような幼児・保育分野の特徴が影響していることも考えられる。

3.1.4 教育・設備・サービスに対する満足度

次に短期大学の教育・設備・サービスに対する満足度について分析する。図4は短期大学の教育・設備・サービスが「不満」を1、「満足」を5とした時の平均値を示したものである。

図4をみると、幼児・保育分野では「図書館」が3.81と最も高く、幼児・保育分野以外では「専

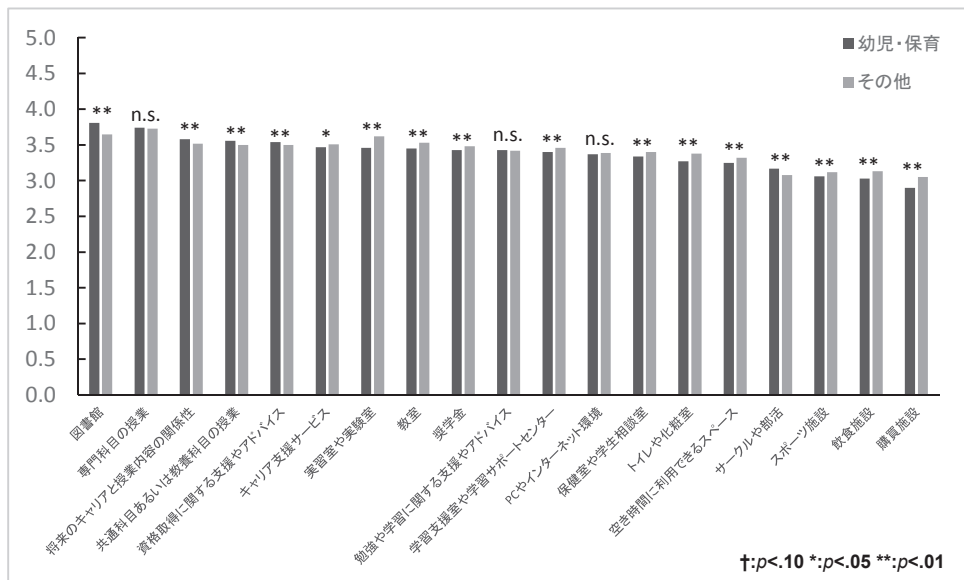


図4 短期大学の教育・設備・サービスに対する満足度 (平均)

門科目の授業」が3.73と最も高くなった。また、「専門科目の授業」は幼児・保育分野においても3.74と2番目に高く、「図書館」は幼児・保育分野以外においても3.65と2番目に高かった。一方、「購買施設」は幼児・保育分野で2.90、幼児・保育分野以外で3.05と最も低い結果となり、「飲食施設」や「スポーツ施設」も同様の傾向がみられた。

幼児・保育分野とそれ以外の分野の授業における学習経験について比較するために、すべての項目についてt検定を行ったところ、「専門科目の授業」と「勉強や学習に関する支援やアドバイス」、「PCやインターネット環境」では優位な差がみられなかったが、「キャリア支援サービス」では5%水準で、それ以外の項目では1%水準で幼児・保育分野とそれ以外の分野で優位な差がみられた。その中でも平均値に比較的大きな差がある「図書館」や「サークルや部活」は幼児・保育分野の平均値がそれ以外の分野と比較すると高く、「購買施設」や「実習室や実験室」は幼児・保育分野以外が高かった。

これらの結果から、全体として短期大学の学習に関わる満足度が高いことが確認できたが、学校の規模とも関連が大きい「スポーツ施設」や「購買施設」、「飲食施設」といった施設面に関する満足度が低い傾向にあることが明らかとなった。「図書館」や「専門科目の授業」といった学習に関する項目の満足度が高い点については、短期大学が学生のニーズに合わせたカリキュラムや設備を設けたり、各コースの教育目的に沿った授業等が行われている結果だと考えられる。分野間の差がみられる項目として、「図書館」や「実習室や実験室」が挙げられていたが、分野によってどの程度施設を利用する必要があるのかによって結果が大きく変動することが考えられる。例えば、図書館については、幼児・保育分野の学生は実習で用いる絵本等を貸し出す取り組みを実施している学校があるなど、図書館が身近な場所になっていることが影響しているのではないだろうか。

3.1.5 総合的な満足度

最後に短期大学の総合的な満足度について分析する。図5は短期大学の総合的な満足度を「不満」を1、「満足」を5とした時の平均値を示したものである。

幼児・保育分野では「他の学生」が3.83と最も高く、幼児・保育分野以外では「短大の先生」が3.73と最も高くなった。「短大の先生」は幼児・保育分野においても3.80と2番目に高く、「他の学生」は幼児・保育分野以外においても3.63と2番目に高かった。一方、「短大やキャンパス」は幼児・保育分野で3.52、幼児・保育分野以外で3.42と最も低い結果となった。

幼児・保育分野とそれ以外の分野の総合的な満足度について比較するために、すべての項目についてt検定を行ったところ、すべての項目について1%水準で幼児・保育分野とそれ以外の分野では幼児・保育分野の方が優位に高かった。その中でも「他の学生」と「短大の事務職員」、「短大での学び(学習)」は比較的差が大きかった。

これらの結果から、幼児・保育分野においてもそれ以外の分野においても短期大学教育全体に対する評価は概ね肯定的であると考えられる。その中でも特に短期大学の教育に対する満足度は高く、先に検討したように教育・設備・サービスに対する満足度の項目においても肯定的

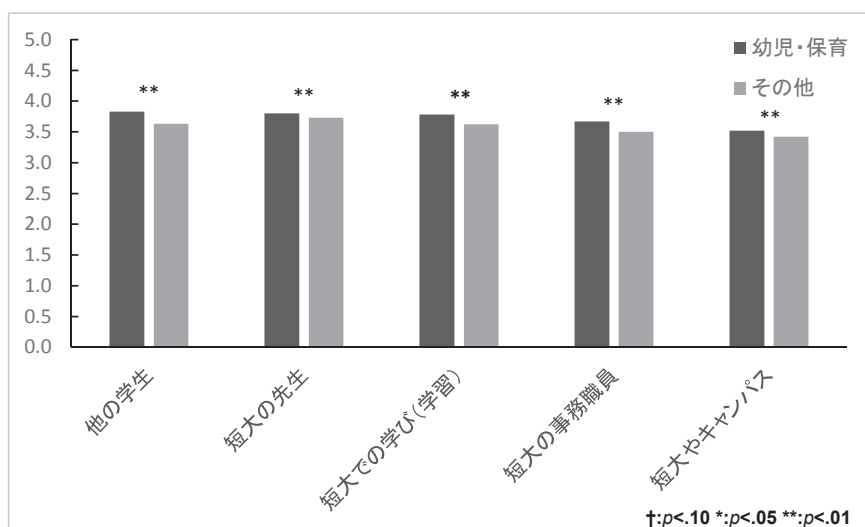


図5 短期大学の総合的な満足度 (平均)

な評価がやや少なかった施設面についての総合満足度が低くなる傾向がみられ、今後は施設面の満足度を上げる取り組みが期待される。また、幼児・保育分野の学生の短期大学教育に対する総合的な満足度はそれ以外の分野よりも高い状況にあるが、その要因は学習経験や知識・経験の変化の項目においても幼児・保育分野の学生の評価が高いことが影響していると考えられる。しかし、どのような点を評価した結果満足度が高くなるのか等、更なる検討を行う必要がある。

3.2 幼児・保育分野の満足度別分析

第二に、幼児・保育分野の学生の総合的な満足度のうち、特に短期大学教育の根幹に関する設問といえる「短期大学での学び(学習)」の満足度の結果別に分析を行い、短期大学に対する総合評価と学習経験や他の満足度との関係性について検討する。図6は幼児・保育分野の学生の「短大での学び(学習)」の結果を示したものである。

図6をみると、幼児・保育分野の学生のうち、先に分析を行ったように「短大での学び(学習)」に対して肯定的な評価を持つ割合は非常に高く、約61.3%にも及んでいた。一方で、否定的な評価を向けている割合は約6.6%であり、割合としては多くないものの、否定的な学生も一定数存在していることが確認できた。また、中間回答の割合は約32.1%であり、短期大学で学ぶ学生の3分の1以上が短期大学での学びを肯定的に捉えられていないという状況であることから、肯定的に捉えることのできるような学びを提供する必要があると考えられる。

そこで、「短大での学び(学習)」のうち、肯定的・やや肯定的を「肯定群」、中間回答を「中間回答群」、やや否定的・否定的を「否定群」の3つに分け、学習経験や知識・能力の変化、教育・設備・サービスに対する満足度にどのような影響があるのかを検討する。

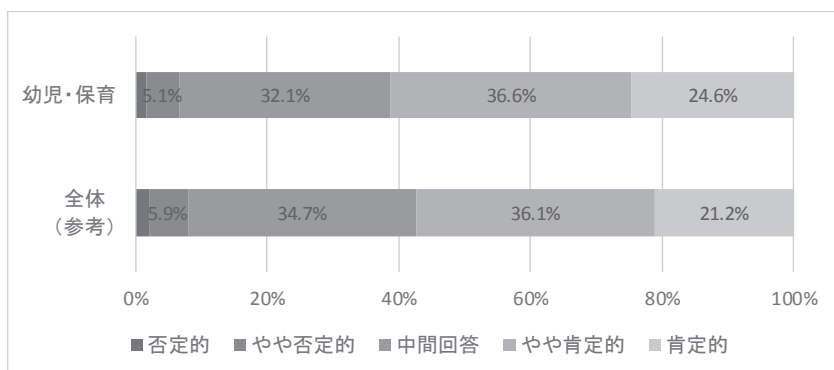


図6 総合的な満足度「短期大学での学び(学習)」の結果

3.2.1 授業における学習経験

短期大学での授業における学習経験を群ごとに分析する。図7は短期大学での授業における学習経験が「あった・ときどきあった」と回答した割合を示したものである。

図7をみると、逆転項目にあたる「授業をつまらなく感じた」と「授業に遅刻や欠席をした」を除いたすべての項目において、肯定群の値が高くなっており、短期大学での学びに肯定的か否定的かによって学習経験が異なっていることが明らかとなった。特に肯定群と否定群の間の差が大きかった項目として、「授業をつまらなく感じた」、「レポートの書き方や文章表現を学ぶ」、「教員が提出物に添削やコメントをする」が挙げられており、「授業をつまらなく感じた」

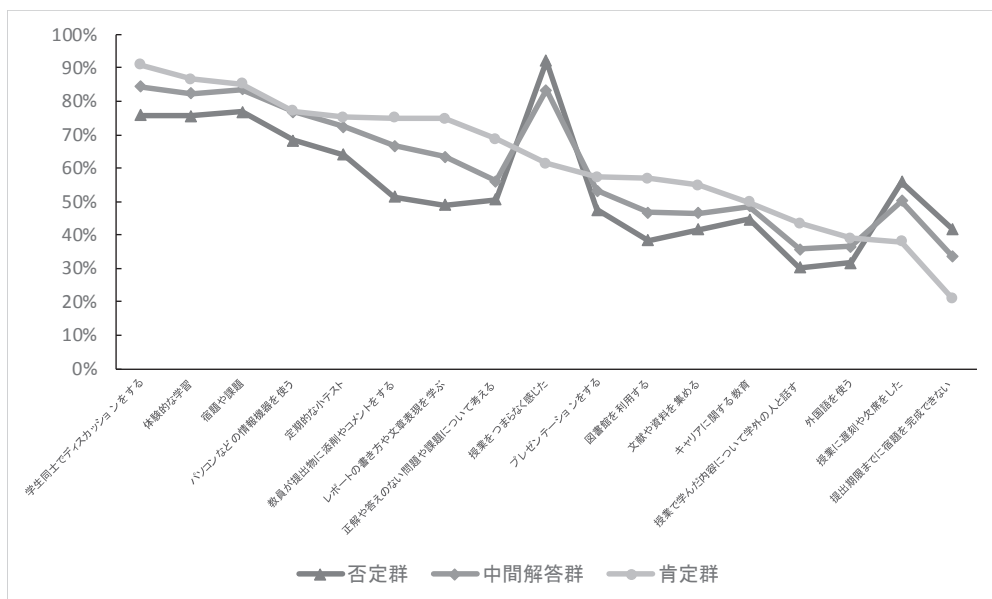


図7 幼児・保育分野の授業における学習経験(あった・ときどきあったの合計)

については否定群の約92.0%、中間回答群の約83.4%が授業をつまらなく感じた経験があったと回答していた。一方で、「キャリアに関する教育」や「外国語を使う」については、比較的差が小さかった。

これらの結果から、学習経験と短期大学での学びに関する総合的な満足度の間には関連があることが確認できた。特に「授業をつまらなく感じた」については、肯定群と中間回答群・否定群の回答が明確に分かれており、短期大学での学びに対する総合満足度を上げるためには、授業を工夫する等、授業をつまらなく感じさせない取り組みが必要になると考えられる。また、「教員が提出物に添削やコメントをする」についても各群の間で大きな差がみられたことから、教員の働きかけ等が重要な役割を果たす可能性があることが示唆されており、授業そのものの内容だけでなく、教員から学生に対する働きかけが必要になるのではないだろうか。

3.2.2 知識・能力の変化

次に短期大学入学後の知識・能力の変化について群ごとに分析する。図8は短期大学に入学後に知識・技能が「大きく増えた・増えた」と回答した割合を示したものである。

図8をみると、すべての項目において肯定群の値が高くなっており、短期大学での学びに肯定的か否定的かによって知識・能力の変化への実感は異なっていることが明らかとなった。特に肯定群と否定群の間の差が大きかった項目として、「挑戦する力(チャレンジ精神)」、「他の人と協力する力」、「自己の理解」などが挙げられており、これらはすべて知識能力が増えたと回答した割合が45%以上も異なっており、総合的な満足度に大きく影響を与えている可能性が

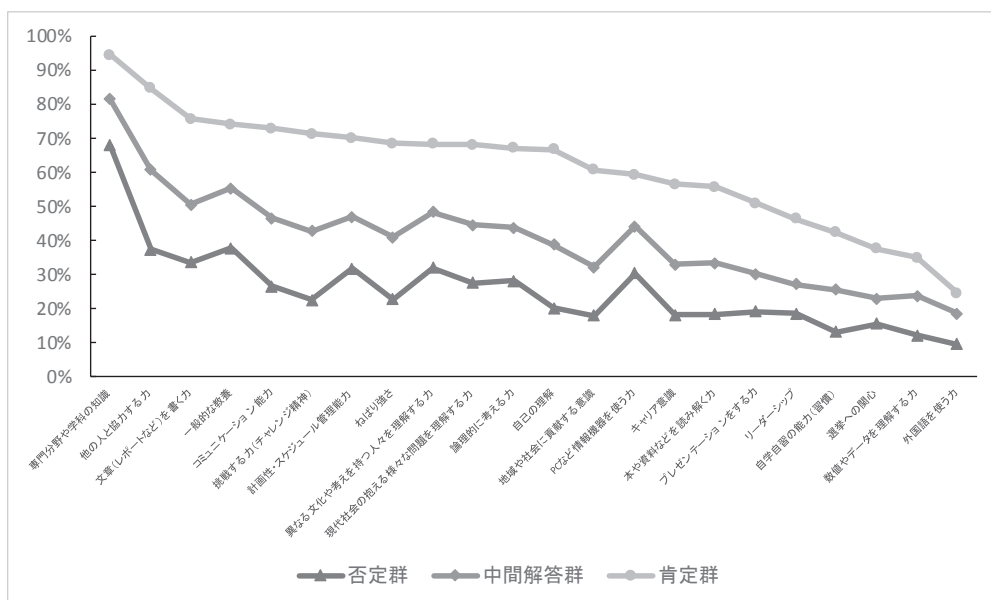


図8 幼児・保育分野の短期大学入学後の知識・能力の変化(大きく増えた・増えたの合計)

高いことについても明らかとなった。一方で、「外国語を使う力」については、比較的差が小さい上に知識が向上したと回答している割合が他の項目と比べて少なかった。また、中間回答群について確認すると、否定群よりも平均的に知識・能力が向上していると回答した割合は高いものの、否定群と同じ項目で肯定群との差が大きくなる傾向があり、程度は異なるもの中間回答群と否定群は知識・能力の向上について同様の傾向がみられた。

これらの結果から、総合評価と知識・能力の変化には関連があることが示唆されており、短期大学での学びに関する総合評価の高い学生と低い学生の間には授業による知識・能力の伸びが大きく異なる可能性があることが確認できた。特に、差が大きかった項目の「挑戦する力(チャレンジ精神)」、「他の人と協力する力」、「自己の理解」などは、授業内容に直接関連があるものだけでなく、授業を通じて間接的に学ぶ要素も大きいことから、授業への積極性等の要因が影響していることも考えられる。また、「外国語を使う力」については、先に述べたように授業において外国語を用いる経験が少ないことが影響を及ぼしている可能性が高いと考えられる。

3.2.3 教育・設備・サービスに対する満足度

次に短期大学の教育・設備・サービスに対する満足度について群ごとに分析する。図9は短期大学の教育・設備・サービスが「満足・やや満足」と回答した割合を示したものである。

図9をみると、すべての項目において肯定群の値が高くなっており、短期大学教育に肯定的か否定的かによって知識・能力の変化への実感は異なっていることが明らかとなった。その中でも特に差が大きかった項目として、「専門科目の授業」、「将来のキャリアと授業内容の関係

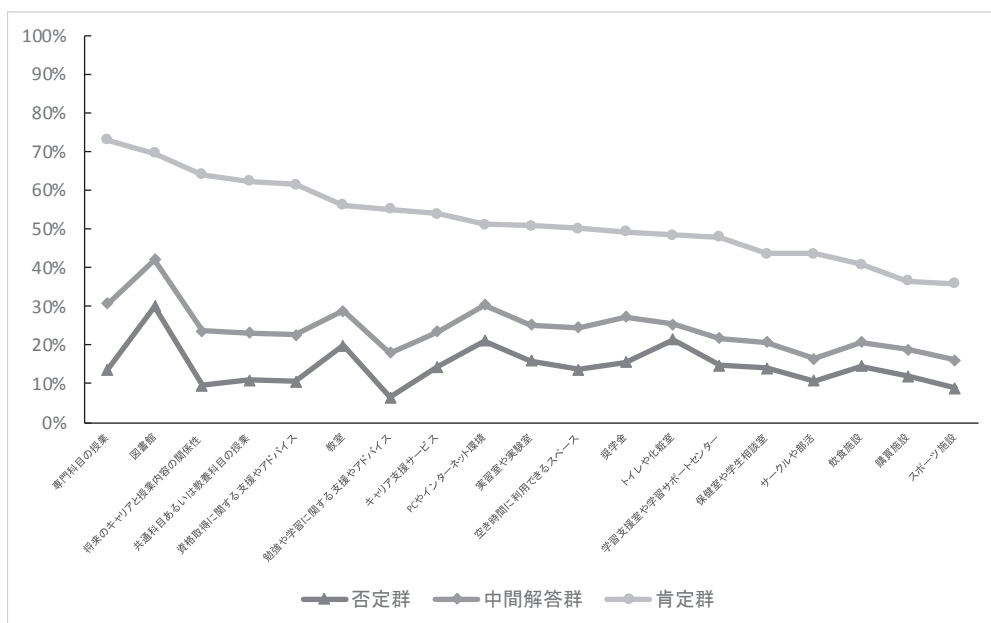


図9 幼児・保育分野の教育・設備・サービスに対する満足度(満足・やや満足の合計)

性」、「共通科目あるいは教養科目の授業」、「資格取得に関する支援やアドバイス」が挙げられ、これらはすべて満足していると回答した割合が50%以上も異なっており、総合的な満足度に大きく影響を与えている可能性が高いことが明らかとなった。加えて、「勉強や学習に関する支援やアドバイス」については、肯定群の約55.1%が満足しているのに対し、否定群は約6.5%と非常に低い結果となっている。「購買施設」、「飲食施設」などについては、比較的差が小さい上に満足したと回答している割合が他の項目と比べて少なかった。また、中間回答群について確認すると、否定群よりも満足していると回答した割合は高いものの、否定群と同じ項目で肯定群との差が大きくなる傾向があり、知識・能力の変化と同様の傾向がみられた。

これらの結果から、短期大学での学びについての総合的な満足度である「短期大学での学び(学習)」と教育・設備・サービスの間には満足度には大きな関連があることが確認できた。もちろん、この結果は同じ「満足度」という観点からの質問項目であり、関連があることは当然ともいえる。しかしながら、個別の結果をみると否定群や中間回答群の特に「専門科目の授業」や「共通科目あるいは教養科目の授業」といった短期大学が提供する学習そのものに対する評価が低いことがわかることから、否定群だけでなく中間回答群へ向けた対応を行うことが重要になるものと考えられる。また、「勉強や学習に関する支援やアドバイス」については、否定群の結果は非常に低く、教職員とのかかわりが学生の満足度に与える影響が大きいことから、特に否定群の学生に対する働きかけを強化するなどの取り組みが期待される。

4. 考察と今後に向けた課題

ここまで、幼児・保育分野で学ぶ学生が、短期大学教育での経験や短期大学に対する評価を幼児・保育分野以外で学ぶ学生との比較等を交えながら検討を行い、その上で短期大学での学びに関する総合満足度の違いによって、どのように学習経験や知識・技能の変化等に違いがみられるのかについて検討を行ってきた。

その結果、幼児・保育分野の学生は幼児・保育分野以外の学生に比べて総合的な満足度ではやや高い傾向があることが明らかとなった。また、統計的検定によって分野間の差異が認められる項目は非常に多かったが、その中でも進学理由においては職業に関連する項目が、授業における経験及び知識・能力の変化においては幼稚園教諭や保育士に必要になると考えられる協調性や思考力に関連する項目が、満足度については実際に学習する上で活用する施設等が他の分野に比べて幼児・保育分野の平均値が高くなる傾向がみられた。その理由としては、様々な要因が考えられるが、幼児・保育分野で学ぶ学生は将来、保育士や幼稚園教諭になることを想定して入学しており、入学時から卒業後のビジョンを自身で描くことができていることが影響しているものと考えられる。また、免許に関連する科目を学ぶ機会が多いことから、学生自身が就職後にも活用できると感じられる授業が展開されるケースも多いのではないかと考えられる。ここで挙げた点以外にも、分野を問わず高い傾向を示したものは、短期大学の存在理由に繋がるとも考えられる職業や専門分野の知識、体験的な学習といった近年重要視される学習方法などであり、短期大学教育の有効性を示す一助になるものといえるだろう。

また、幼児・保育分野の学生の短期大学での学びに関する総合満足度の違いによって、学習経験や知識・技能の変化等に大きな差が生じることが確認できた。その結果から、短期大学での学びに関する総合評価が低い学生への働きかけを行う必要があることが確認できただけでなく、中間回答の学生（「どちらでもない」と回答した学生）も総合評価の低い傾向がみられたことが明らかとなった。したがって、中間回答を行う学生についても、総合評価の低い学生と同様に短期大学教育に対して肯定的な印象を持っていないものと考えられ、学びに関する総合評価が低い学生と同様の働きかけを行う必要があることが確認できた。中間回答をした学生は全体の30%を超えていることから、今後積極的な働きかけを行っていくことが期待される。

本研究の課題として、分野に限定した分析を行ったことで、地域や規模等の影響を受けているか否かを検討出来ない点が挙げられる。しかしながら、分野を限定して分析を行うことの重要性は他の研究からも明らかとなっていることから、本研究の有効性は十分にあったものと考えられる。今後は複合的な要素を加え、さらに分析を進めていきたい。また、本研究では「短期大学生調査」の結果のみによって分析を行ったものであり、その評価をした理由まで検討を行うことができていない点も挙げられる。今後各短期大学の協力を得ながら、教学データやインタビュー調査も併用した形での分析を行うことが必要であると考えられる。

注

1) 短期大学生調査の詳細は以下のWebサイトを参照のこと。

(<http://www.jaca.or.jp/service/other/research/tandaiseichosa.html>,2018.9.29)

引用(参考) 文献

- 安部恵美子・小嶋栄子, 2010, 「『在学生調査』からみた長崎短期大学の教育：全国調査との比較から見た長崎短期大学の教育：全国調査との比較から見た本学教育の傾向と対策」『長崎短期大学研究紀要』22：1-20.
- 安部恵美子・小嶋栄子, 2011, 「キャリア教育・職業教育の探求1」『長崎短期大学研究紀要』23：43-52.
- 安部恵美子・小嶋栄子, 2012, 「短期大学の学生調査2」『長崎短期大学研究紀要』24：23-31.
- 中央教育審議会, 2014, 「短期大学の今後の在り方について（審議まとめ）」文部科学省.
- 後藤宗理, 2003, 「大学生における進学動機・自己意識・一専攻分野間の比較」『名古屋市立大学人文社会学部研究紀要』15：1-18.
- 文部科学省, 2017, 『学校基本調査報告書』日経印刷.
- 岡村美和, 2017, 「短大生調査 2015 から見た臨床検査学科の学生の特徴」『山陽女子短期大学紀要』38：49-58.
- 堺完, 2014, 「学生調査にみる短大生の学習成果に関する傾向分析」『短期大学コンソーシアム九州紀要』4：31-8.
- 堺完・山崎慎一・黄海玉, 2016, 「短大生調査を用いた短大の自己点検・自己評価に資する地域別比較の検討」『短期大学コンソーシアム九州紀要』6：21-29.
- 高木明美・松本拓也・三谷学, 2010, 「保育現場におけるパソコンの活用調査」『宇部フロンティア大学人間社会学部紀要』1：80-4.

- 短期大学基準協会調査研究委員会, 2018, 『短期大学学生に関する調査研究—2017年度調査全体集計結果報告—』短期大学基準協会.
- 帝国データバンク, 2018, 「『人手不足倒産』の動向調査(2018年上半期)」(<https://www.tdb.co.jp/report/watching/press/p180702.html>, 2018.9.29)
- 山田礼子, 2007, 『「転換期の高等教育における学生の教育評価の開発に関する国際比較研究」研究成果報告書』木村桂文社.
- 山崎慎一, 2018, 「大学生との比較から見た短期大学生の学習時間の現状と課題」『桜美林論考 心理・教育学研究』9: 43-50.